

千里山短信 2 故郷のいま

一八回生 口羽 竜一

住宅地としての千里山の歴史は、故千里山人が既に初期の会誌に詳しく紹介されている。その始まりは一九二〇年(大正九年)、大阪住宅経営株式会社の設立である。同社は「千里山住宅地」の名称のもとに宅地開発を開始、当時の中産階級を対象に土地付建売住宅と貸家の営業を始めた。開発に際しては、英国の田園都市レッチウォースの街並みをモデルとした。住戸数は一九二二年(大正十一年)の一〇〇余戸から順次拡大し、一九二八年(昭和三年)には四〇〇戸以上となった。同年、この会社は一応の目的を果たしたとして、京阪電気鉄道の子会社、新京阪鉄道(阪急京都線の前身)に事業を引き渡し解散した。そのいきさつは第一噴水の記念碑に記されている。創業者の山岡社長は、この事業は社会的事業であるとして俸給は一切受け取らず、責任を果たし、終始会社のため社会のため尽くされたといわれる(以上、千里山自治会編『千里山七〇年の

あゆみ』から)。

千里山住宅地のオフィシャルな町開きがあったのかどうかわからないが、会社解散をエポックとして一九二八年を街開きの年としてもよいのではなからうか。そうすると来年二〇一八年は千里山の九〇周年となる。その頃生まれた方が存命なら九〇代の高齢者だが、移住してきたおとな、すなわち第一世代の住民はすでに世を去ったことだろう。第二世代となった私は既に八〇歳を過ぎていたので、町を支えているのは第三、第四世代の住民が中心と考えられる。人が代われば住処も変わる。町も変わる。町は生き物である。

千里山の変貌ふりは駅東の整備事業に集約される。二〇〇七年の会誌には「千里山駅周辺整備事業」の内容が紹介されたが、昨二〇一六年九月、一〇年越しにこの事業が完了した。旧住都公団の千里山団地も含めてこの地区は新しい街に生まれ変わった。阪急の改札を出るとその前にあったマーケットの跡は交通広場に変わり、タクシー乗り場も新設された。そこから幅員二一〜一九米の道路が千二小学校の前まで伸びている。広場前の信号を左折すると道は登りとなり、左にカーブ

して阪急のホームをまたぐ線橋となる。その先は第一噴水から来る道につながる。これによって駅前の路切は歩行者専用となった。旧千里山団地の中層住宅は、高層の分譲マンションと賃貸マンションに建て替えられて街の景観は一変している。都市整備機構は建替えの資金をねん出するため、土地の一部を分譲マンションの業者に売却したと想像される。

一〇年前に、住宅地発足の頃に建てられた住宅が現在の程度に残っているか、ざっとだが調べて会誌にレポートを提供したことがある。その結果は一五戸程度で、調査漏れがあったとしても二〇戸程度しか残っていないと思われた。当時の売り出し広告には郊外生活の理想郷というキャッチフレーズが使われ、環境の良さをアピールしていた。住宅の形態は和風および洋風の二種があった。和風住宅で残っているのは平屋で寄棟屋根に日本瓦が基本であり、洋風住宅では切妻屋根に洋風瓦を基本に様々なデザインが見られた。当時の設計者は張り切って創意工夫に励んだらしいことが見て取れた。これを昭和モダンとすると、今なら昭和レトロといえる。これらの住宅もこの一

〇年の内に半数は姿を消したと見られる。現在の千里山の街並みは現代のハウスメーカーの住宅によって作られていると言えそうだが、残された擁壁や石積みには辛うじて往時の雰囲気が残っている。結局、我々の故郷千里山で今後も昔のままに残されるのは千里山神社と千里寺くらいになりそうである。

NHKの朝ドラではヒロインの故郷はしばしば農村に設定されている。美しく穏やかな里山の風景は故郷のイメージそのものと言ってよい。日本人なら誰でも知っている唱歌ふるさととは、事あるごとに歌わることが多いので第二の国歌といってもよいくらいである。しかし、兎追いしの句を実感を以て歌える人はもういないに違いない。それでも千二小学校では戦前なら実際に兎狩りができたこともあるという。

千里山の故郷としてのアイデンティティといえば、昔は周囲の農村にないお洒落な街並みとそれを取り巻く野山と果樹園であった。高級住宅地とも言われて明確な差別化があった。しかし今は周辺の都市化の波に埋没して吹田市の住居地域の一区域に過ぎない。時の流れはいかんともすることができない。今の千

里山に生まれ育っても自分の成長とともに町も変化して原風景が失われていくなら、ここが故郷という意識は希薄になるのではなからうか。それが都会で生まれ育った者の宿命だろう。それでも故郷意識が何に結びつくかと言えば、実在の町もさることながら同郷でかかわりのあった家族や同級生や友人たちとの絆であり、いかにいます父母、つがなきや友がき、と歌われるとおりである。千里山会の存続理由もそんなところにあるのだろう。我われが他にできることとしては千里山の歴史をあとの世代に伝える以外に何があるだろうか。

紙面に余裕があるので、本題に直接のかかわりはないが、二〇一一年の会誌に書いた千里線便りのその後をお伝えする。通勤に通学に誰もが通った淡路駅の東側一帯では大阪市の区画整理事業が行われ、この部分はほぼ完了して新しいビルも建ち始めている。この事業に関連して現在平面で交差している千里線と京都線は立体交差（二階および四階）となり、現在は駅で分断されている東側と西側は公共通路でつながる。関連工事として下新庄、柴島、崇禪寺の各駅も高架とな

る。工事は二〇〇八年、施工可能な場所から着手された。当初の予定では高架切替えは二〇一八年とされたが、その後工期は七年延長され、高架切替えは二〇二五年となった。聞くところでは用地買収の難航が原因らしい。工事の進行は緩やかだが、本線路のいたるところで工事のための仮線が供用されている。千里線の神崎川橋梁の下り線（大阪方面行き）は既に仮線となっている。

千里山の西の玄関口、緑地公園駅を通る北急の終点は一九七〇年の開通以来千里中央であったが、昨年箕面延伸が決まりすでに着工されている。完成は二〇二一年であるがこの延伸は箕面市長年の悲願だった。終点となる箕面市萱野地区には国道一七一号が東西に走り、既に大規模ショッピングセンターがあるので、鉄道開通とともにここは千里中央に次ぐ北摂の都心に発展すると思われる。



1. 旧文化路切（現在車両通行禁止）手前より横断跨線橋を望む



2. 駅側から広場を見る



5. ここを上ると跨線橋



3. 右折して跨線橋へ向かう。奥の三角屋根は上り線側西口駅ビル



6. 駅前広場の広々とした通路、中央奥に東口改札、右側はオアシス



4. この奥遙か先に千二小学校